

五日、饗庭篁村 「元禄より文化に至る俗文学」 福地復一 「徳川中世の美術」

六日、本多種竹 「元禄より文化に至る詩道の変遷」 長尾雨山
「元禄より文化に至る儒学の変遷」

七日、竹内久一 「元禄より文化に至る彫刻に就て」 小杉楯邸
「元禄時代美術と歴史の関係」

右の講義筆記は『錦巷雜綴』第九卷（明治三十一年二月）に掲載されている。岡倉校長の計画では元禄から文化年間にかけての文学については坪内逍遙、饗庭篁村、幸田露伴に、詩文については本多種竹に、大勢については三上参次に、風俗については関根正直に、歴史については小杉楯邸に、室内好みについては前田香雪に、儒学の変遷については長尾雨山に依頼することになっていたが、種々の事情でこのような結果となった。

5 承和楽置物

左記の記事により製作担当者は向井勝幸であったことがわかる。

○舞楽圖の置物 美術の進歩へ近來著しく殊に青年美術家の名工を續出するへ最も喜ぶべき事なり先年横濱貿易組合に大紛議ありたる節當時の日本銀行總裁川田小一郎氏の仲裁に依つて首尾能く落着せし勞に酬ひん爲め該貿易商一同より美術品を川田總裁へ贈呈せんとて昨年五月中東京美術學校へ其製造方法を注文し同校長へ海野勝珉氏の高弟にて技術上最も技群の聞へある同校助教向井勝幸氏に命じたるが注文の美術品ハ「承和樂」の圖にして其彫刻の地金ハ重に銀を用ひ之れに金銀銅赤銅等の象眼を施し此程漸やく竣工せしを以て一昨十五日横濱の注文先へ引渡したるが出来最も巧妙にして近來の傑作なれば一旦川田家へ贈呈したる

上來九月開設の東京彫工會競技會へ出品する由

（明治三十年六月十七日『やまと新聞』）

6 修学旅行 九月十一日

第一回修学旅行（京都・奈良）を意味する。はじめはこのように選抜して旅行させた。

関連事項

① 彫金科の意見書

左記の意見書は本年九月の規則改正を目安として彫金科教官たちが作成したものと思われる。彼らの工芸教育に対する考え方の一端を示す好資料といえよう。本学彫金研究室保管。

彫金教授法改良趣旨

彫金秘訣

参考品

彫金ニ付美術工藝ト工藝トヲ明瞭ナラシムル事

工藝科ノ名称ヲ削除スル事

彫金教授法改良趣旨

豫備科生徒ニシテ彫金志望者ニ限り豫備科目ノ木彫ヲ以テ換フルニ彫金ヲ以シ彫金一年ノ手本ヲ教授ス

第一年及第二年ノ課程ニ於テ従来ノ二年及三年ノ手本ヲ以テ教授ス

但シ從來ノ手本中多少修正ヲ加フル所アル可シ

第三年ノ課程ニハ鍛金科ニ於テ製作シタル下地成積品ヲ彫刻セシムル事種類左ノ如シ

卷葉箱 名刺血^{イマ} 文房具 香炉 香合 小花瓶

但シ一ハ参考品ニ依リ一ハ新案ヲ以テ彫刻セシム

第四年ニ於テハ第三年以上ノ程度ニ適スル物ヲ以卒業製作トス

彫金秘訣

彫金秘訣ハ彫金科ノ最モ必用ナル者ナリ故ニ一科目トシ第二年ニ於テ毎週一時間正科トシ講話教授ス

彫金秘訣要領

合金法

金銀銅臙銀真銅赤銅其他ノ合金方法

色附法

惣テ金屬ニ関スル色付ノ方法

道具製作法

鑿其他ノ製方及焼入方

彫金沿革史

彫金鑑定心得

以上加納擔任ス

参考品

参考品ヲ重ニ製作シ生徒ヲシテ鑑識ニ安カラシメ且ツ販路ニ適ス

ル物品ヲ製作シ参考室ニ備フル事

参考品種類

置物 香炉 額面 其他

丸彫 高彫 半肉 薄肉 肉合

金銀 色繪 或ハ 素彫ノ類

図様

神佛 仙人 聖覽^{イマ} 大和人物 山水 花鳥 獸魚 之類

右参考品ヲ製作スルニ多費ヲ要ス

彫金ニ付美術ト工藝トノ區別ヲ明瞭ナラシムル

在來單ニ金屬彫刻ト稱スル者ニ種々アリテ之レヲ大別スレバ美術彫刻ヲナス者ト工藝彫刻ヲナス者トノ二トナス 左ニ其ノ大意ヲ述ブ

述ブ

美術彫刻トハ後藤祐乘裝劍彫刻ノ規矩ヲ定メシヨリ横谷奈良大月ノ諸流皆此ノ彫刻法ニ據ラザルハナシ且ツ此ノ法ニ熟達スルト否トニ依テ名人大家ト稱セラル、物ニシテ其ノ彫刻法ノ如キハ積年実地ノ經驗ニアラザレハ其ノ妙味ヲ知ルヲ難シトス又彫金家ノ門ニ入り修業スル者ノ多クハ其ノ術ニ熟達スル者甚タ稀ナリトス

工藝彫刻ト稱スルハ其ノ種甚タ多シ置物鍔道具彫家形彫象嵌師等ノ類ニシテ又是レ等ノ業ニ從事スルモノヲ以テ一般道具彫ト云フ道具彫ハ裝劍彫刻家ノ規矩ヲ知ラスシテ大ニ其ノ彫刻ノ趣ヲ異ニシ見ルニ足ル可キ物アラズ故ニ彫刻家ノ賤ム所ニシテ又

道具彫ノ輩モ彫刻家ヲ尊フ所ナリ

古来ヨリ道具彫ノ手ニ成リテ社寺佛閣等ノ裝飾金具ノ類ニ於テ
意匠ニ富タル物アリト雖モ一トシテ彫刻法備ハラズ美術トシテ
見ル可キ物ナシ而シテ道具彫等ノ為ス所ハ彫刻家ノ容易ニ為シ
得ル所ニシテ道具彫ハ之レニ反シ彫刻家ノ為ス所ハ容易ニ為ス
能ハザル所ナリ且ツ彫刻家ノ門ニ入りタル者ニシテ其ノ術ノ未
熟ナル者下リテ道具彫鑄師家形彫置物鑄等ニ移職セル者多シ
以上述フルカ如ク彫刻ト道具彫トハ大キニ其ノ趣ヲ異ニスル所ナ
リ然ルニ明治ノ初年庖刀ノ令発布セラレシヨリ以後裝劍彫刻家ハ
一般廢業ノ有様トナレリ道具彫置物鑄等ハ是レニ反シ元ヨリ家具
裝飾ノ専門ナルカ故ニ好機ニ乗シ一時盛ンニ花瓶香炉置物等ヲ製
シ明治十年博覽會等へ多ク出品シタリト雖モ一ツトシテ注目スベ
キ者ナシ彫刻家ニ於テハ其ノ趣キヲ一変シ諸器物ニ彫刻法ヲ應用
スルニ至リ漸時進歩シテ博覽會共進會等ニ製作出品セリ然ルニ裝
劍彫刻家ノ製作ニ係ル物ノ賞得道具彫等ノ手ニ成リタル物ニ賞與
アル事ナシ

是彫刻法ノ規矩アルト否トニ依テ然ラシムル所ナリ爰ニ於テ其彫
刻ニ差アル事明瞭ナルハ言ヲ俟ス然レモ現時純然タル彫刻法ニ依
リ彫刻シツ、アル者ハ実ニ指ヲ掘スルニ過キス是ニ反シ普通工藝
彫刻家ハ其數夥シキカ故ニ是等ノ區別ヲ判然ナラシメサル時ハ彫
金ニ於ケル本意定ラズ凶案等モ此ノ点ニ注意セサル時ハ終ニハ工
藝道具彫ト混雜シテ賤ム可キ彫刻法ト成ルノ憂ナキヲ保シ難シ
本校ノ如キハ純然美術ノ模範タル位地ニ在ルヲ以テ右ノ点ニ判然

區別ヲ要スルハ勿論ナリ故ニ前述ノ次第ヲ以テ工藝彫刻タルト美
術彫刻タルトノ區別明瞭ナラシムルヲ希望ス

工藝科ノ名称ヲ削除スル事

前述ノ如ク美術彫刻ト工藝彫刻ト區別アルニ於テハ本校ノ工藝科
彫金ト稱スハ甚タ遺憾トスル処ナリ是ニ付生徒モ工藝ト稱スルヲ
以テ賤ム如キ感アリ且ツ擔當教員ニ於テモ甚タ欲セサル所ナリ
併シ一般ノ物稱工藝ニアラサル者ナシト雖モ本校ニ於テハ單ニ彫
金料トシ工藝ノ名称ヲ削除アラン事ヲ切望ス

明治廿九年二月十八日

東京美術學校長

岡倉覺三 殿

加納 夏雄
海野 勝珉
向井 繁太郎

② 日本繪画協會創立と本校日本畫教授陣の刷新強化

本年三月二十日、岡倉校長は日本青年繪画協會と本校繪画科卒業
生たちとを合体させて日本繪画協會を創立した。同会の役員は左記
の面々で、会頭に公爵二条基弘が、副会頭に岡倉が就任した。

評議員 畑仙齡、尾形月耕、大出東臯、岡本勝元、大橋雅彦、梶

田半古、角田玉明、高橋玉淵、村田丹陵、村上委山、山
田敬中、松野霞城、福井江亭、小堀鞆音、寺崎広業、天
草神来、佐竹永村、西郷孤月、溝口宗文、下村親山、島